

## 17. 清正とNHK大河ドラマ

### 1. 加藤清正と家族の物語

加藤清正は、熊本では清正公と呼ばれ神様扱いですし、全国にも清正を祀る神社やゆかりの寺院が多数あります。また、戦国大名ファンの間でも、トップクラスの人気を誇ります。そんな中、熊本県および熊本市は、日曜夜のNHK大河ドラマの主人公として清正を取り上げるようNHKに陳情していると聞きます。NHK大河ドラマの主人公に採用されれば、主人公ゆかりの地が一躍人気観光地になりますから、地元にとっては経済効果が大きく、嬉しい限りです。2016年度に隣県福岡の黒田官兵衛が大河ドラマの主人公に採用されたことから、官兵衛より清正が偉大と考える熊本県人は、清正が採用される日は近いと考えていると思います。

しかし、日本史をよく見ると、官兵衛の方が秀吉の軍師として有名ですし、多くの大事な場面で活躍しています。清正は、26歳で肥後半石の大名になりますが、それまでに何か華々しい活躍があったわけではありません。国内で合戦を指揮したのは、肥後半国の大名となった後、残り肥後半国を領した小西行長の天草で起きた天草国人一揆の鎮圧戦くらいです。天草国人一揆の鎮圧戦で清正は、肥後国人一揆の鎮圧が遅れ切腹となった前肥後国主佐々成正の二の舞にならないよう、応援要請した小西の指示には従わず、なりふり構わず鎮圧を急いでいます。国人に嘘の講和情報を流すなど決して堂々とした戦いではありませんでした。清正が合戦の経験を積むのは、1592年から1598年までの朝鮮出兵の際です。しかし、これは侵略戦争であり、大河ドラマで描ける内容ではありません。

清正は、慶長3年(1598年)の12月2日に朝鮮から博多へ帰還しており、清正物語は、ここから始めます。慶長16年(1611年)6月24日に死去していますから、時間としてはわずか12年間しかありません。内容的にも戦国武将らしい物語としては、七将襲撃事件、薩摩の庄内の乱への介入、家康からの上坂禁止命令と上杉景勝討伐への参加不許可、関ヶ原の戦いを巡る両陣営間での綱引き、九州での西軍との戦いなど最初の2年間に限られます。その後は徳川幕府が成立しすっかり平和な時代となり、清正が活躍するのは二条城会見の設定くらいとなります。従って、清正を単独で主人公とすれば、NHK大河ドラマにはなりません。しかし、清正の妻や3人の子供たちや孫まで含めた清正の家族の物語にすれば、清正一族の波乱万丈の物語となり、面白い大河ドラマが出来上がると思われれます。そもそも、加藤家改易後本来なら歴史から消し去られたはずの清正が復活できたのは、2人の娘のおかげなのです。そして、家族を通して清正を見ると、俗説とは異なる清正の実像が見えてきます。

主人公は順に次の通りです。

- (1) 清正
- (2) 清正の正妻かな姫(清浄院)
- (3) 長女あま姫

- (4) 次女八十姫
- (5) 第2代藩主忠廣
- (6) 忠廣の嫡男光正

以下、各主人公にまつわる物語の見所です。

(1) 清正

清正については、博多に帰還した際、石田三成の「先ずは領国でゆっくりされよ。来年早々伏見で茶会を開き慰労しよう」という言葉に憎悪を募らす清正から物語は始まります。そして、七将との謀議の場面、自分らの庇護者および次の天下人として家康を見立てる場面、家康との協議、七将襲撃事件などが展開していきます。その後、薩摩藩で庄内の乱が起き、家康は大老として仲裁に動きますが、なんと清正が内乱軍を支援していたことが判明し、家康が激怒します。その結果清正は、家康から上坂禁止処分を受け、上杉景勝討伐軍にも参加を許されません。その後、三成が家康討伐の旗を揚げ、関ヶ原の戦いに向けた動きが始まります。ここで西軍の監視下に置かれた清正の正妻かな姫が大坂屋敷から脱出する経緯が挟まれます。清正は、熊本で黒田如水と協力して、九州の西軍の平定に動きます。ここは黒田如水の活躍が目立つのですが、清正は、先ず肥後半国を領する小西の宇土城を落とそうとしますが、落城まで約3週間も掛け、松浦鎮信や大村喜前、有馬晴信らの参加を許すなど関ヶ原後を見据えた動きをします。宇土城落城後は、柳河に駆けつけ、朝鮮で恩義のある立花宗茂に礼を尽くして開城を要請し、受諾させます。その後、薩摩討伐の為、立花・鍋島・如水らと薩摩との国境に向かいますが、その際熊本城天守で如水らを持て成します。如水は、清正が巨大な城郭を作っていたことに驚きますが、それが明・朝鮮軍の日本侵攻に備えたものであることを聞いて更に驚きます。秀吉死去後朝鮮では、日本軍の撤退方針を察知した明・朝鮮軍が3路と西側海上から日本軍が守る倭城を総攻撃し、日本軍は命辛辛に逃げ帰っており、秀吉死去に伴う日本の混乱に乗じ、今度は明・朝鮮軍が日本に侵攻してくる可能性があります。これに備えて防衛拠点を整備していたのは、清正一人ではないでしょうか。その後関ヶ原の戦い後の論功行賞で肥前福岡を拝領した如水は、明・朝鮮軍の日本侵攻に備えて、熊本城を上回ると言われる難攻不落の福岡城を築きます

その後、清正らは、薩摩国境に移動し、家康の侵攻命令を待ちますが、家康は逆に侵攻中止命令を出します。そのあと関ヶ原の論功行賞の下交渉が行われますが、清正は、かな姫の苦難の大坂脱出劇を持ち出して、豊後に港と宿舎を置く領土の獲得を要望します。家康はこれを認めますが、それに対応する肥後領の上知を求め、清正は、肥後本土と陸続きでなく、キリスト教徒が多く統治が厄介な天草を差し出します。この結果、1601年の年初に行われた論功行賞で発表された清正へ与えられる肥後52万石には、天草は含まれないこととなります。

1603年に家康は、征夷大將軍となり、徳川幕府を開きますが、その後は清正が武將として活躍する場面ありません。ここから家康は、姻戚関係により元豊臣恩顧の大名の取り込みを図ろうとし、清正も姻戚関係により徳川幕府に食い込もうとします。そこで使われたの

が、清正や家康の娘や息子たちです。

## (2) かな姫（清浄院）

かな姫は、七将襲撃事件後、清正が正室（継室）に迎えた家康の養女で、家康の生母於大の弟水野重忠の娘です。家康としては、清正を徳川方に引き入れる目的があり、清正としては、次の天下人は家康と見立て、有利な立場を築こうとする目的があったと思われます。この時期、七将襲撃事件のメンバーである福島正則、蜂須賀家政、黒田長政も家康と姻戚関係を結んでいますので、七将間で次の天下人は家康という見立てがなされたものと思われます。従って清正は、この時点で秀吉の嗣子秀頼を次の天下人とする意志はなかったことになります。

石田三成が西軍を組織し家康討伐の兵を挙げたとき、かな姫は肥後藩の大坂屋敷におり、西軍から人質として大坂城に入れられそうになります。同じ立場の細川ガラシャがこれを拒否し自害したことから、大坂城には入れられず厳しい監視下に置かれますが、これを大坂の肥後藩大坂屋敷留守居役の大木土佐守と熊本から派遣された船奉行梶原助兵衛の機略により、船で大坂脱出に成功します。そして、如水がいる中津に到着し、危険な山道や西軍大名の支配地を通り、熊本に無事帰還します。清正としては、家康の養女であるかな姫を救出できたことで、家康へ顔向けできるとホッとしたことと思われます。この脱出劇を元に、清正は家康と交渉し、豊後に 3 郡を得ることとなります。このかな姫大坂脱出劇も物語としては面白いと思われます。

かな姫は、清正の死後 1 万石の化粧料を与えられ、忠廣後継や八十姫と徳川頼宣の婚約履行、加藤家再興のための清正遺産の保管、加藤家改易に連座して処分された忠廣長女の免赦などで活躍します。

## (3) あま姫

1606年には、清正の長女あま姫と徳川四天王 1 人の館林藩主榊原康政の嫡男康勝の婚姻が行われます。康政は清正の憧れの武将だったようで、清正は朝鮮出兵に際して、康政の馬印を借り受けたと言われています。従ってこの婚姻は、清正と康政の間で決めたものを家康が承認して成立したものと思われます。清正は、この婚姻を大変喜び、100人を超える女中らをあま姫の世話人として付けたと言います。しかし、あま姫が 9 歳と幼かったこと、世話人の数が多過ぎ館林藩の財政を圧迫したことで、館林藩では不評をかったようです。しかし、これで清正は、一層徳川の有力大名の地位を確保したことは確かです。

榊原康勝に嫁いだあま姫は、康勝が若くして死去したため、肥後藩江戸屋敷に戻りますが、徳川幕府の世話により、大坂城代阿部正次の嫡男正澄の元に嫁ぎ、1男1女をもうけます。あま姫は、2人目の出産後死去します。その後、あま姫の夫正澄は家督相続前に死去し、阿部家の家督は正澄の弟に移り、あま姫の子正能は、阿部家庶流の老中阿部忠秋の養子となります。忠秋は、加藤家のことをよく知る人格者の老中でした。忠秋は、この翌年忠廣が配流先の丸岡で死去すると検使を派遣し、清正の遺品をすべて江戸へ持ち帰えらせたと言います。忠廣死去に伴い、清正の遺品は、行き場を失う可能性があったことから、これを危惧し

た忠秋は、先手を打ち、清正の血を引く正能を養子にし、清正の遺品を相続させようとしたと推測されます。しかし、忠廣長女が上州沼田の真田家に預けられ生存していたことから、清正の遺品は、この忠廣長女の元に届けられることになったと言います。その後清浄院や八十姫らの働き掛けで、この忠廣長女は、預り処分を解かれ、紀州藩重臣の養女となり、幕府旗本阿部四郎五郎の嫡男正重に嫁ぎ、清正遺品は阿部家へ渡ります。清正の有名な片鎌鍬は、阿部家から八十姫のいる紀州家へ献上され、明治になり紀州家から国へ寄贈され、東京国立博物館で展示されることになったようです。

阿部忠秋の養子となった正能は、その後幕府老中となり、血筋の者から幕府老中が輩出します。そして、あま姫の血を引く最後の男子の阿部正喬（まさたか）が幕府老中を務めていたとき、八十姫の孫（血はつながっていない）に当たる第5代紀州藩主徳川吉宗が第8代将軍に就任します。吉宗は、将軍就任後清正に興味を持ち、細川藩を通じ清正の記録や遺品を取り寄せ、閲読・閲覧しますが、この背景には、自分の祖母（八十姫）と同じ血筋の男子が幕府内で老中を務めていたことに驚き、改めて外曾祖父である清正に興味を持ったものと思われま

す。ここから、加藤家改易と共に百年近く忘れ去られていた清正が再度歴史の舞台に登場します。これは、八十姫の孫吉宗の将軍就任と八十姫の姉あま姫血筋の阿部正喬の幕府老中在職が重ならなければ起きなかったと思われ、2人の娘が清正を再び歴史の表舞台に呼び戻したとも言えます。正喬には子供がなく、阿部家からあま姫血筋はこれで途絶えますが、吉宗血筋の将軍が第14代まで続きますので、幕府内での清正の位置付けは不動のものとなります。そして、吉宗の孫の松平定信が老中に就任し、武士に儒学を修めさせ、忠義こそ武士の本分としたことから、忠義の武士の代表として清正が祭り上げられます。ここから、清正＝忠義の武士伝説が始まります。なお、清正は、秀吉死後家康に乗り換えていますから、言われるような豊臣恩顧の大名ではなく、忠義の武士の代表には不適切です。

#### (4) 八十姫（瑶林院）

時代は前後しますが、1603年家康は、征夷大將軍に任命され、江戸に幕府を開きます。この年の後半、清正は、浅野幸長を伴い、江戸の家康の元に伺候します。これを喜んだ家康は、清正と自分の養女かな姫の間に生まれていた八十姫（3歳）と家康の十男頼宣（2歳）の婚約を言い出したとあります（徳川実記）。清正との姻戚関係を揺るぎないものとして、清正を徳川方に組み入れる意図があったと思われま

す。そして1609年、八十姫と頼宣の婚約が正式に決まります。清正は、「八十姫の嫁入りに、肥後3年分の経費をかけても惜しくない」と喜んだと言います。一方家康は、この年、幕府直轄領である駿府を、駿府藩50万石として立藩し、頼宣を水戸20万石から転封し、初代藩主としていますから、この婚約への入れ込みようが分かります。そして慶長15年（1610年）10月、頼宣の傅役三浦為永が結納使として熊本城を訪れて、婚約は正式に

整います。

熊本城の本丸御殿に「昭君之間」と言われる最上級の謁見の間がありますが、これの完成時期は1610年頃とされていますので、「昭君之間」は、この結納使を迎えるために作られたと考えられます。「昭君之間」のいわれは、床の間奥や左側の帳台構えに、中国前漢時代に北方の匈奴の国と宥和を図るため、匈奴の国王に嫁がされた漢の官女王昭君の旅立ちの絵が描かれていたことによると言われています。江戸時代からの伝承では、「清正は、豊臣秀頼が徳川幕府から大坂城を追われたとき、ここに迎え、西国の豊臣恩顧の大名を糾合して戦うつもりだった」と言われているようで、多くの観光案内にも書かれています。しかし清正は、朝鮮から帰還して以来、家康を次の天下人と見立て、家康と姻戚関係を強めています。八十姫と家康の十男頼宣の婚約が決まったのに、なお秀頼を迎えて戦おうと考えていたとは、常識的には考えられません。当時は第2代将軍秀忠の時代ですが、第3代将軍を巡っては、秀忠と正室お江が次男忠長を溺愛し、長男家光には全く愛情を示さなかったことから、江戸城内では「次の将軍は忠長様」と噂する家臣が多かったと言います。そこで、家光の乳母春日局が家康を訪ね「将軍は長子相続こそが幕府安定の道」と訴えたと言われています。乳母が家康とこんな話ができるはずがなく、家康の側付きの女官にそれとなく話し、その女官から家康の耳に入ったと考えるのが妥当だと思われる。この頃は、将軍の跡継ぎについての決まりはなく、家康の鶴の一声で決まる状況でした。このときの将軍候補は、秀忠の長男家光、次男忠長が有力でしたが、家康の十男頼宣も家光の2歳年上なだけであり、家康から将軍に指名される可能性がありました。頼宣は、家康死去まで家康の元で育ち、家康から目をかけられていました。大坂冬の陣で初めて出陣した際には、家康が自ら武具を着せたと言いますし、夏の陣で頼宣が先攻を願い出たところ家康が却下したことから、頼宣は涙を流して悔しがり、それを見た家臣が「殿は若いからまた機会は何度もございましょう」と慰めたところ、頼宣は「14のこのときが2度とあるか」と答え、それを聞いた家康が「今の言葉こそ鏝ぞ」と喜んだとあります。

これらの事から家康の頭の中には、頼宣を将軍にという考えもあったと思われる。清正は、それを敏感に感じ取っていたのではないのでしょうか。自分の娘の婿が将軍になるかもしれない、その期待を以て、いつか将軍になった頼宣を迎えることを夢見て作ったのが「昭君之間」だったのではないのでしょうか。秀頼を迎えるための部屋より遥に現実性があるように思えます。現に第7代将軍家治の死去により家光の血筋が途絶えた後、頼宣の孫吉宗が第8代将軍に就任し、清正の夢は半ば実現します。吉宗は、将軍就任後清正の記録や遺品を調査していますが、熊本城「昭君之間」は清正が祖父頼宣の将軍就任を夢見て作ったものであると見抜いていたかも知れません。

八十姫と頼宣の婚約が決まったことにより、清正は徳川でも有力な姻戚大名の地位に上り詰めます。そこからは、清正は家康のために全力で働きます。1610年には、名古屋城普請に尽力しますし、その後は二条城会見に向けて豊臣方説得に全力を尽くします。清正は、秀吉に引き立てられた恩は忘れておらず、豊臣家には、徳川幕府体制の中で名誉ある地位に

就いて欲しいと願っていました。江戸参勤の折には、行き帰りに大坂城の秀頼に伺候していましたから、豊臣方からの信頼もありました。二条城会見は、豊臣方・徳川方双方に信頼のある清正でなければ実現しなかったと思われます。二条城会見の日に清正は、東寺で頼宣と並んで秀頼を迎えます。それは頼宣の岳父（予定）としての立場であり、二条城会見を秀頼と家康という姻戚関係者の懇親会という位置付けとしたための演出です。二条城会見の際、清正は、秀頼と家康の懇親の席に同席しておらず、別室で相伴に預かっていた。従って、秀頼と家康の懇親の際、清正は秀頼の傍を一時も離れず、胸には短刀を忍ばせていたと言うのは、作り話です。

この二条城会見を無事終了させて暫く伏見に留まったあと、清正は帰国の途に就きますが、船中で倒れ、6月24日に熊本城で死去します。ろれつが回らなかったと言いますから、脳卒中ではないでしょうか。

ここで、もう一つ厄介な問題が残ります。八十姫と頼宣の婚約履行の問題です。家康は、豊臣家の信頼が厚い清正を通じて、豊臣家が徳川幕府に臣従するよう説得するために、八十姫と頼宣の婚約を決めたと思われます。清正の死去に伴いこの狙いは潰えたわけで、八十姫と頼宣の婚約も無意味になりました。従って徳川幕府内では、八十姫と頼宣の婚約解消も検討されたと思われます。これは、八十姫と頼宣の婚姻が1617年と婚約から8年後であることから伺えます。そんな状況で八十姫の母である清浄院は、家康の養女であること、実家の水野家は家康の母の実家であること、水野家当主水野勝成は家康の信頼が厚く、将軍秀忠にも気に入られていたことなどを利用し、婚約の履行を働きかけたと思われます。そして1617年に婚姻は実現しますが、当時の頼宣の傅役は清浄院の伯父の水野重央であり、重央は頼宣が紀州藩主となった後も付け家老として頼宣に仕えたこと、八十姫は婚姻前に叔父水野勝成の養女となっていることなどから、八十姫は、清正の娘としてではなく、水野家の娘として頼宣に嫁ぐことになったと思われます。そのため八十姫は、頼宣に嫁いだ後、水野の娘として実家に帰ってきたように扱われ、清正の娘として虐められることはなかったはずですが、加藤家では、その後様々な問題が噴出しますので、八十姫にとってもこの方が良かったと思われます。

尚、八十姫嫁入り後の1619年、頼宣は、駿府から紀州に転封され、徳川御三家となる紀州藩の初代藩主となります。徳川御三家は、本来家康とゆかりがある土地に置かれるはずですが、紀州は家康と縁もゆかりもありません。この転封を実施した秀忠の狙いは、家光が次期将軍だとして、家光に何かあった場合の将軍は、次男忠長であることを明確にすることにあつたと思われます。そのために、家康とゆかりが強く将軍候補筆頭の地位である駿府藩主に忠長を入れ、忠長のライバルとなる頼宣を紀州に飛ばしたと考えられます。

#### (5) 加藤忠廣

清正死去により、加藤家物語の第2章が始まります。清正は、幕府から忠廣後継の承認を得ていなかったことから、規則上は、加藤家は改易となります。そこで重臣たちが幕府に掛け合い、忠廣後継の承認を得ようとしています。ここで忠廣後継の承認が下りるのに1年近く

かかったことに注目すべきだと思われます。その原因は、清正死去に対する家康の落胆が大きかったことが挙げられます。八十姫と頼宜の婚約は、清正を徳川姻戚大名とし、豊臣家問題の解決に当たらせることでした。その狙い通り清正は、先ず二条城会見の実現に漕ぎつけました。次に家康が清正に期待したのは、豊臣方を説得し、大坂城を退き適当な領地に移らせ徳川幕府に臣従させることだったと思われます。この期待が清正の死去により水泡に帰したのです。残るは大坂の陣への道だけでした。家康にとって、清正亡き加藤家はどうでもよかったのです。ここで加藤家が改易を逃れるために尽力したのが、家康の養女で清正の正室のかな姫（以後清浄院）だったと思われます。実家の水野家は家康の生母於大の方の実家で、兄の水野勝成は家康の信頼が厚かったことから、水野家からも加藤家存続を働きかけたと思われます。その結果幕府は、藤堂高虎をトップとして肥後藩に調査を入れ、忠廣を補佐する家老団の設置、いくつかの支城の廃止などを条件に、忠廣後継を許します。この際清浄院には、1万石の化粧料が与えられています。

#### ① 牛方馬方騒動

忠廣が藩主となった肥後藩は、清正時代が清正のワンマン体制だったことから、藩政を担える人材が育っておらず、家臣団も清正が連れてきた尾張・近江などの者、地元の郷土から採用した者、前国主佐々成正家臣、前肥後半国の領主小西行長家臣、前柳河藩主立花宗茂家臣などで構成され、まとまりがありませんでした。そこで1618年に起きた事件が牛方馬方騒動です。これも格好のドラマの題材になると思われます。この事件は、肥後藩を後見する藤堂高虎の信頼が厚く幕府目付的役割を担っていた下川棒庵が、次のような内容の訴状を幕府に提出したことから始まりました。

(i) 肥後藩においては、家臣団が元家老加藤美作守、その子で家老を継いだ加藤丹後守および忠廣生母の兄である玉目丹波守のグループ（馬方に対して牛方）と加藤右馬充ら4人の家老グループ（右馬充から馬方）に分かれと対立しており、幕府の指示に従い一致して行動できる状況にない（薩摩の押さえにはならない）。

(ii) 大坂の役の際も藩士の多くは忠廣と共に幕府に奉公したかったが、美作守ら豊臣家に恩義を感じている連中に遠慮した結果、あらぬ噂（豊臣方に味方する）となったものである。

(iii) 美作守ら3人は、忠廣のためにならない依怙夤夤なことばかりやっているが、私（棒庵）がその旨忠廣に進言しても聞いてもらえず遠ざけられる有様であるので、私は職を辞した。

(iv) かれらを一堂に集めて穿鑿して欲しい。

これには、次のような背景があります。ある日忠廣は、江戸で大名の織田信良（織田信長の孫）から食事に招かれます。こういう場合、毒殺を防ぐため料理人や給仕役は招かれる方が連れて行く慣例だったようで、信良は忠廣に慣例に従い連れてくるよう言いましたが、忠廣は信頼しているから必要ないと断り、小姓2名だけ連れて行くことにしました。これを聞いた忠廣に近侍する木造内記は、父の木造左内と相談して、当日織田家の勝手方に詰めるこ

とにしました。木造家は伊勢の名門北畠家の出で、信良の母が木造家から嫁いでいたため織田家とは近い関係にあり、信良としても何ら異存ありませんでしたし、内記は家老加藤丹後守の承認も得ていました。当日織田家の勝手方に詰めている内記を見た忠廣は、気分を害し、屋敷に帰った後木造親子を呼び、叱責しました。木造親子は、加藤丹後守の承認を得ていると言いましたが、加藤丹後守は、あずかり知らぬことと逃げたのです。これに怒った木造親子は脱藩します。棒庵は、京都の公家の名門九条家の出身で、公家や朝廷との折衝や情報収集のために清正が礼を尽くして迎えた人物で、清正死去後は、肥後藩の後見人となった藤堂高虎から幕府目的な役割と忠廣の後見役を言い渡されていたようです。藩主となった忠廣は、当初こそ棒庵の言うことをよく聞いていたようですが、だんだん生母正応院とその兄玉目丹波守の影響力が増し、棒庵の話に耳を貸さなくなったようです。棒庵は、娘を織田信良と木造内記に嫁がせており、忠廣と信良が親しくなったのは、棒庵の存在があったからでした。棒庵は、内記からこの経緯を聞いて憤慨し、職を辞します。そして藤堂高虎を通じ、肥後藩の政治が乱れていると訴え出たのです。棒庵の狙いは、美作守派、特に玉目丹波守の排除と忠廣を懲らしめることにあったと思われます。加藤家改易問題にまで発展した牛方馬方騒動は、棒庵のプライドを傷つけられた怒りがもたらしたものでした。従って、実質的な訴訟の構図は、原告は棒庵、被告は牛方と忠廣です。それが棒庵に代えて馬方を原告とし、牛方と馬方の対立の問題にすり替えられたのです。

加藤美作守らは、次のような反論をします。

(a) 棒庵が訴えるに至ったのは、棒庵の義理の息子（木造内記）の身勝手な行いを美作守が叱ったことに起因する。

(b) 大坂の陣の際は、棒庵を派遣して家康側近の本多正純に相談させたところ、棒庵は正純の意見と偽って自らの意見を通そうとした。

(c) 馬方こそ忠廣幼少を良いことに私利私欲の限りを尽くしており、自分らはそれを阻止しているのである。美作守が隠居知行を辞退したことをみれば自明のことである。

(d) 馬方派の家老下川又左衛門は、預り米を自分の蔵に入れて横領しているではないか。この結果、牛方が押し戻した格好になり、秀忠の前で審問をおこなうこととなります。

馬方は、牛方の不屈きな行為として大坂の役の際のことを中心に新たに13ヶ条を挙げます。主なものは次の通りです。

(i) 美作守・丹後守は、目をかけていた家臣が大坂の役の際豊臣方に走ったにも関わらず、知行をそのままにしたり、心づけを与えたりして支援していた。

(ii) 美作守は、関ヶ原で西軍に味方し改易された者の家臣を召し抱えた。

(iii) 丹後守は、大坂の役の際、豊臣方に使われる恐れがあるのに加藤家の船を大阪川口に留め置いた。

(iv) 美作守と丹後守は、玉目丹波守の知行として好きどころを切り取らせた。他の家臣の知行地を取り上げることもあった。

(v) 玉目丹波守が屋敷を普請する際には、家臣や百姓を借り出し、伐採が禁止されてい



る木まで切り出して使った。

その場には、大阪の役の際参陣を禁止された肥後藩に目付役として派遣されていた阿部正之（忠廣死去後忠廣長女の舅となる）らも出席し、馬方の主張に同調します。これには牛方は有効な反論ができなかったため、将軍秀忠の裁定により、牛方の加藤美作守・丹後守、玉目丹波守その他27名が他家預り、豊臣方に直接加担した家臣7名が切腹などの処分となりますが、忠廣はまだ幼くこれらの問題に係わっていなかったとして責任を問われませんでした。忠廣は当時17歳で決して幼くないのですが、1613年に将軍秀忠の姪（会津藩蒲生秀行に嫁いだ秀忠の妹振姫の娘琴姫）が嫁いでおり、加藤家は有力な姻戚大名の位置付けであったことが理由と思われま

す。この処分については、美作守や丹後守、丹波守ら最も重く処分されるはずの重臣が他家預りで済まされ、その後その子たちは幕府旗本などに取り立てられていることから、牛方はこれ以上争えば丹波守の妹である忠廣の側室正応院の処分や加藤家改易になると考え、それほどの大問題とは考えていなかった幕府と取引し、処分を受け入れたのではないかとの見立てもあります。牛方馬方騒動は、そもそも棒庵のプライドを傷つけられた怒りから起きており、内容的にも加藤家改易に発展するような事件ではなかったように思えます。

この後秀忠は、家光に将軍の座を譲り大御所になってからも忠廣に目をかけ、忠廣も秀忠を慕っていたようです。また忠廣は、秀忠がかわいがる次男忠長と仲が良かったと言われてい

#### （6）忠廣嫡男光正

##### （光正の悪戯と加藤家改易）

1632年には加藤家改易騒動が起こりますが、そこで主人公を演じるのが忠廣の嫡男光正です。光正は忠廣の正室琴姫の息子ですから、将軍家血筋になります。そこで松平姓を賜り、家光の光の一字をもらい光正と名乗っています。そういうこともあってか、光正は、かなり傾奇者だったようです。江戸屋敷で少なくとも2度大掛かりな悪戯を企てたようです。1度目は、臆病で少し頭がおかしい小姓組の組士をからかうために、近習や組頭、小頭などを仲間

にこれから江戸城に討ち入ろうとする場面を作り上げ、その場にその組士を呼び、「先攻の大將の1人に命じるから直ぐに準備をして来るように」と命じます。驚いたその組士は、組屋敷に戻ると家人を連れて逐電します。そして南町奉行所に届け出ますが、この男の話しぶりが支離滅裂で痴人の世迷い事と見なされたこと、本来大名家の問題は奉行所ではなく評定所の管轄であることなどから、この口述書は放置され、2年間明るみに出ることはありませんでした。

2年後、光正は、又悪戯を考えます。今度は、顔なじみの旗本をからかってやろうと考え、「我らは、将軍家光の日光参詣途中で家老の土井正勝様と謀って将軍家光を亡き者にする計画を進めてきたが、実行するときが来たので確認されたし」との内容の連判状を作り、2名の旗本の所に届けます。届ける役の中小姓の顔を知られている旗本井上新左衛門には、屋敷内に投げ込み、顔が知られていない旗本室賀源七郎には、取次の者に渡します。連判状の

投げ込みがあった井上新左衛門は、内容に驚き、急ぎ江戸城に登城し職奉行に届け出ます。居合わせた職奉行兼老中の松平伊豆守は、連判状に、加わる者の氏名と花押がないこと、さらに差出人や次に届ける者の記載もないことから、「これは出来の悪い狂言」と判断しますが、内容が内容だけに、作成者の割り出しを進めます。そしてある日、新任の南町奉行から、引き継ぎで書類を改めていたところ肥後藩に居たという者から書き採った奇怪な口述書が見つかったとして届けられます。それを読んだ松平伊豆守は、連判状を受け取った室賀源七郎の取次の者に、肥後藩の江戸屋敷を見張らせます。その結果そこから、届けに来た男が出て来たため拘束し尋問したところ、光正が企てたものと判明します。

この後は、この光正の悪戯を父忠廣が知っていたかどうかが問題になりますが、忠廣を取り調べた結果、知っていた様子はありませんでした。そこでどういう処分が下されたかというところ、次のようなものでした。

光正「將軍の爪のはしをも汚し」「不届きなる儀を書き廻らしき候儀、曲事に思し召され」「切腹をも仰せ付けらるべき儀に候えども」「うつけものと思し召さるにつき」「命の儀はご赦免」され、「飛騨国に遣わされ」。

忠廣「この度の曲事、肥後守は全く存ぜざる事顕然たり」「されば常の作法も悪しからざるにおいては肥後1国をそのまま下し置くべく候えども」「近年諸事無作法、その上江戸にて生まれ候男子と母をおことわりもなく国許に遣り候儀」「公儀を軽んじ、曲事に思し召され候」「ついては、お国を召し上げあれ、庄内へ遣わされ」。

簡単に言うと、光正は、本来切腹だけど「うつけもの」だから、飛騨配流で許してやる。忠廣は、知らなかったのは間違いないから、日頃の行いが良ければ何の処分もないところだが、近年「諸事無作法」であり、「無断で妻子を江戸から国許に帰すという無礼」を行っているから、改易し庄内配流とする、ということです。

「諸事無作法」については、内容が不明ですし、「無断で妻子を江戸から国許に帰すという無礼」についても、この頃参勤交代は法度化されておらず、男子と母の江戸在住は慣習的なものでした。従って、これは他の明示できない本当の理由に代えて挙げられたものと思われる。明示できない本当の理由は何だったのでしょうか？それは次のことが考えられます。

(i) 忠廣は第2代將軍秀忠の妹振姫(会津藩蒲生秀行室)の娘琴姫を正室にしていたが、側室(生母の兄玉目丹波守の娘)に入れあげ、琴姫とは疎遠になっており、その不満が従弟である家光の耳に届いていたこと。(家康の息子徳川信康が正室の信長娘徳姫から、信康と母の築山殿が甲斐の武田と通じていると報告されたのと同じような状況が想定されます。)

(ii) 忠廣は、忠の1字を下賜されるなど第2代將軍秀忠に可愛がられ、1623年に家光が將軍に就任してからも頻りに食事に招かれるなど親交を続けていた、また家光より弟の忠長と仲が良かったなど、家光としては心情的に憎々しく思っていたところ、この年(1632年)3月に秀忠が死去し、忠廣の庇護者がいなくなったこと。

(iii) 忠廣は、江戸での評判が悪いばかりでなく、領国の肥後でも領民の不満が高まっていたこと。(その原因は、1619年(八代地震)と1625年(熊本地震)の2回の地震に

よる復興費用を賄うため、石高を過大に設定し、過酷な年貢の取立てや重い労役を課していたためと思われます。)

(iv) 大御所秀忠の死去により、権力が家光に集中したことを天下に見せつける格好の機会だったこと。

従って、加藤家改易は、よく言われるような加藤家が豊臣恩顧の大名家だったからではありません。加藤家は、清正が朝鮮から帰還以来、徳川家と姻戚関係を強め、徳川の有力姻戚大名家となっていました。家督が忠廣から徳川血筋の光正に引き継がれれば、徳川親藩に上り詰めていたかもしれない存在でした。忠廣が凡庸だった、光正の徳川の血が暴れるときに悪かったというしかありません。尚、忠廣は、大名でなければ素直な好青年であり、清正の素の気質に近いと思われます。

## 2・NHK大河ドラマ化に向けて必要なこと

清正物語のNHK大河ドラマ化は、NHKに陳情しているだけでは実現しません。戦国時代や江戸時代の研究者や小説家への働きかけなどが必要です。

そこで次のようなことを提案します。

### (1)「加藤清正妻子の研究」「続加藤清正妻子の研究」の重版

清正についての最新の学術書は、福田正秀・水野勝之氏著の「加藤清正妻子の研究」「続加藤清正妻子の研究」(以下「妻子の研究」と表記する)だと思われます。「妻子の研究」に基づくこれ以前の清正に関する出版物の内容には誤りが多く、参考にならなくなります。「妻子の研究」が出版された以降の清正に関する研究論文では、これを参考にしていないものはないと言っていいほど、現在最も信頼されている清正研究書となっています。

清正の研究書は多くありません。また清正を研究の中心にしているという大学の研究者はいないのではないかと思います。それは、清正の活躍した時代が短く、加藤家も清正死後約20年後には改易され、史料がほとんど存在しないからです。歴史的にも、清正は、豊臣秀吉と徳川家康の脇役を飾る1人に過ぎません。従って、豊臣秀吉や徳川家康の研究者がいついかに清正についても触れていることが多いように思います。それに対して「妻子の研究」は、清正の4人の妻や4人の子供、3人の孫の存在に光を当てることによって、清正の歴史的な位置付けを明らかにし、人間性を浮き彫りにしています。この研究の特徴は、清正継室清浄院の血筋である水野勝之氏の墓石や過去帳まで辿ったフィールドワークにあると思います。そこから玉つき状に新たな史料が発見され、驚くほどリアリティのある研究成果になっています。まるでドキュメンタリー小説を読んでいるようです。

私の見解も多くは「妻子の研究」に拠っています。「妻子の研究」が多くの歴史研究者や小説家の目に留まればよいのですが、そういう状況にはないと思われます。先ず「妻子の研究」は今絶版であり新刊は入手できません。古書を探しますと、大変高価な値付けになっています。そこで「妻子の研究」の重版が待たれます。2冊の「妻子の研究」は、重複も多いので、2冊を1冊にまとめると良いかも知れません。

## (2) 「妻子の研究」の内容を平易に書いた新書版の出版

「妻子の研究」は学術書なので、史料をふんだんに使い、表現も学術用語を多用し、一般人には難解です。そこで、史料はあまり引用せずに事実関係だけを述べた簡単な新書版を出して、一般の方にも読んでもらう必要があります。価格は3,000円を超える「妻子の研究」に対して、新書版は1,000円以下にします。一般の方の支持がなければ、NHK大河ドラマ化は実現しません。

## (3) 清正と家族を描いた小説の執筆依頼

時代物の小説家に依頼して「妻子の研究」などに基づいた清正とその家族の物語の小説を書いてもらう必要があります。現在でも清正を主人公にした小説は数が少なく、清正にだけ焦点を当てているため、内容が乏しいものになっています。これを家族にまで広げれば、面白い物語になります。そして、清正が復活したのは、2人の娘のおかげであることが分かり、男性にも女性にも楽しめるドラマとなります。尚、「妻子の研究」の執筆者の1人である福田正秀氏がお書きになれば、一番史実に即した物語になると思われれます。

## (4) 熊本城顕彰会季刊誌のネット公開

清正について調べていくと、結局、清正については熊本以外ではほとんど関心を持たれず、研究されていないことが分かります。そこで最後には、熊本城顕彰会の季刊誌論文に行き着きます。大変優秀な論文が多いのですが、季刊誌購読者にしか読まれていません。読者は1000人もいるのでしょうか？これでは、清正ファンを増やすことには役立ちません。季刊誌は有料購読になっていますから、発行後1年間は購読契約者だけが読めるものとし、1年たったらネットで公開し誰でも読めるようにすべきだと思います。そうすれば、全国の清正ファン方が読めますし、論文執筆者も評価を高める機会が増えると思います。

## (5) 清正NHK大河ドラマ化に向けた一元組織の設置

上記は、ある程度の資金とサポート要員が必要ですから、熊本県と熊本市で予算を付け、要員を出して、支援組織を必要があると思います。その場合、3年くらいに期限を切ることが必要です。

## 3. 大河ドラマのライバル

NHK大河ドラマ化に当たって清正のライバルには、どういう大名や人物がいるのでしょうか？私が考えるところ、以下の通りです。

### ① 藤堂高虎

何度も主君を変えた大名の代表格。外様でありながら徳川幕府で譜代扱いにまで上り詰めた処世術は見事。城作りの名人でもある。これまであまり良く見られてこなかったが、その処世術に光を当ててみるのも面白い。

### ② 細川藤孝（幽斎）（細川忠興ではない）

室町時代に生まれ、足利将軍家、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康とときの天下人に重用され続けた武人であり文化人であった稀有の人物。現在19代を数える細川家の実質的な始祖

で、その教えが脈々と受け継がれる。係わった人物は歴史上の大物が多く、歴史の大舞台を見るようなドラマになると思われる。多くの資料が残っており、ドラマ執筆に有利。

### ③ 水野勝成

「妻子の研究」の共同研究者の水野勝之氏の先祖筋に当たる。清正の正妻かな姫の兄。三河刈谷藩の嗣子ながら藩で殺傷沙汰を起こし、諸国を放浪。放浪から京都に帰り家康に仕え、その後刈谷藩藩主となり、関ヶ原の戦いや大坂の役で活躍、初代福山藩主となり福山発展の基礎を作る。加藤家改易では熊本城受取りの幕府方上使を務め、島原の役にも参加するなど激動の人生を生きている。

### ④ 立花宗茂

戦国無双の猛将かつ忠義の人。10代から合戦に参加し、小軍で相手の大軍を破る合戦の名手。清正は、朝鮮で救援を受け、命の恩人と奉る。関ヶ原の戦い前には、周囲の東軍が勝つから東軍に就くべきという助言を振り切り「自分の今があるのは太閤のおかげ」と西軍に就く。その結果、食うも食わずの牢人生活を経て、將軍秀忠から1万石の大名に取立てられ、ついには旧領柳河藩主に返り咲くという奇跡の復活劇を成し遂げた人。天国の後地獄を味わい、ついには天国に戻るというドラマチックな筋立てになり、見る人を元気にするにはうってつけ。

### ⑤ 細川ガラシャ（玉）

本能寺の変で織田信長を屠った明智光秀の三女で、細川忠興の妻となる。美貌で聡明。忠興は玉の美貌の虜になり、本能寺の変後主君殺しの光秀の娘である以上、離縁するか殺すべしとの重臣の主張を撥ね退け、味土野の山家に匿う。その後この事実を知った秀吉から許され、大坂玉造の細川邸に移る。玉の美貌は広く知れ渡っており、秀吉も忠興が九州在陣中に大坂城に呼び出し、手籠めにしようとするが、玉が懐から短剣を落としたことから、諦める。忠興の玉に対する執着も尋常ではなく、玉の外出は一切認めず、玉の居住地域に忠興以外の男が出入りすることも認めなかったという。そういう中、忠興が九州在陣中で、侍女たちに墓参のための外出が許されていた彼岸の中日に、玉は、侍女に紛れ、侍女でキリスト教徒の清原マリアの導きで教会を訪れる。その後はまた外出の機会がなく、秀吉がキリシタン禁制令を発布した後、清原マリアが神父の代理となって洗礼を受けガラシャの名を賜る。それを知った忠興の怒り様は尋常でなく、侍女の鼻や耳を切り落としたという。

そして、慶長5年（1600年）7月、石田三成が家康打倒を掲げ挙兵し、家康に随行していた豊臣恩顧の大名を引き戻すため、大坂在住の妻や子供を人質として大坂城に收容しようとし、最も影響力があると考えた細川ガラシャの收容を試みる。これに対してガラシャは、忠興の言い付けを守り、自害はキリスト教では許されていないため、家臣に槍で心臓を突かせ果てる。これを知った三成は、大名や領民の反発を恐れ、收容作戦を中止した。この事件は、東軍に付いた武将の結束力を強め、細川家が徳川幕府から重用される要因の1つになったとされる。

細川ガラシャの透明感と忠興の異常なまでのガラシャ愛のドラマは、ちょっと異質な大河

ドラマになるかも。